

ヘボンの足跡——その働きと死に

対する態度に関する一考察——

清水 秀 樹

I. はじめに

本稿は、幕末、明治期に来日をしたプロテスタント宣教師の働きを明らかにし、死に対する態度を考察することにより、その実像をより深く把握することを目的とする。中心としたのは、ジェームス・カーチス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn 1815-1911) である。ジェームス・カーチス・ヘップバーンの日本での働きを、先行の研究より概観し、死に対する態度について考察する。

II. 日本での足跡

ジェームス・カーチス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn 1815-1911) は、信仰心厚い両親に育てられ、学友からの感化、そして、神との関係を真剣に考え、祈りを通して、宣教医として海外で働くことが、召命であるとの想いに至った。そして、その想いに共鳴した夫人と祖国を離れ、日本へと旅立った。

ヘボンは、1859年から1892年の在日三十三年の間に、医療事業、和英辞典の編纂、聖書の翻訳、キリスト教教育、教会の献堂などに携わった。その働きの全ては、福音の伝道に向けられていた。ヘボンは、施療所での治療を行うことで、人々の信望を得、和英辞典の編纂を行うことで、宣教師の日本語の学習を助けた。そして、聖書の翻訳を行い、教会を創立することで、福音の説き明かしを行った。

幕末の日本は、キリスト教を厳しく取り締まり、尊皇攘夷の思想は、外国人への不穏な事件をたびたび引き起こし、劣悪な衛生状態は、伝染病を蔓延させ、多数の死者を出していた。国民性、文化の違いは、生活のいたるところにあり、見慣れない外国人は、常に好奇の目にさらされた。また、日本語の難解さは、その習得を妨げ、生活の中で、一語一語覚えていかなければならなかった。

III. 喪失と祈り

ヘボンは、日本への伝道に旅立つ前に、ひとつの大きな出来事を経験している。それは、幼い子どもとの喪失の悲しみである。中国伝道の際に二人の子どもを失くし、帰国後のニューヨークで三人の子どもを失くすという喪失である。

ヘボンは、自分の力ではどうすることもできない死という出来事を目の当たりにし、神にその意味を幾度となく、問い、そして、祈りは、深まり、やがて、心の平安が与えられ、それを神の御心と受け止めた。キリスト教信仰者であるヘボンにとって、祈りは、生活の中の営みであるが、この時の祈りは、悲しみ、嘆き、苦しみなど、感情の溢れるままに、それを告白していたと想像することができる。そして、ヘボンが、人知れず神と向き合う時間があったことをわたしたちが、想像するとき、そこにひとりの弱さを抱えた、人間の姿をみることができる。

ヘボンが、喪失の悲しみから立ち直っていく過程において、こうした神との対話だけではなく、信仰を同じくする夫人、そして、弟の存在も大きかった。それは、喪失の意味を、信仰によって互いに「神の御心」であると受け止めていたからである。そのように受け止めることができたことによって、他者や自分に非があつてこのようなことが起こったのだという想いから、解放されていったと想像することができる。

ヘボンは、子どもの死を通して、死に対する人間の、そして、自分の無力さを改めて悟り、自分に与えられた有限な身体をいかに生かしていくか、ということに改めて、強く意識した。

ヘボンの死に対する態度から明らかになることは、ひとりの弱さを抱えた人間の姿と、弱さを抱えながらも、神に祈り、信頼して、神の愛の中に生きることを望みながら、自分の与えられた生を全うしようとする姿である。

ヘボンは、いかなる時も、自分自身の力ではなく、主に祈り、委ねていくことを忘れていない。そして、驚くべきは、この姿勢は生涯変わっていない。

ヘボンは、死を前にして、自分の力ではどうすることもできない状況であっても、若く、力に満ちたときであってもすべてを主に帰すことに第一に考えている。ヘボンの死に対する態度から、示唆され

ることは、「自分の生が有限であるということ意識し、謙遜に、自分と他者の生を尊び、そして、自分の生を全うすること」である。

ヘボンの生涯、それは、この祈りの繰り返してはなかつたらうか。

「神にこそ、すべての栄えと誉れ、今も後も永久にあらんことを。」

引用・参考文献

- 高谷道男編訳.1959.「ヘボン書簡集」.岩波書店
高谷道男編訳.1976.「ヘボンの手紙」.有隣堂
高谷道男著.1961.「ヘボン」.吉川弘文堂
岡部一興編 高谷道男 有地美子訳.2009年.「ヘボン在日書簡全集」.教文館
横浜指路教会創立百周年事業実行委員会編.1974.「指路教会百年の歩み」.日本基督教団横浜指路教会
横浜プロテスタント史研究会編.2008.「横浜開港と宣教師たち 伝道とミッション・スクール」.有隣新書
明治学院大学学長室.2005.「明治学院大学の教育理念と創設者ヘボンの生涯」
永井春子著.1973.「キリスト教教理」.日本キリスト教会大会実行委員会
山口昇監修.1998.「エッセンシャル聖書辞典」.いのちのことば社
アルフォンス・デーケン著.2003.「よく生き よく笑い よき死と出会う」.新潮社

書簡にみる第二代駐日アメリカ公使

ロバート・H・ブライン

安部純子

Robert Hewson Pruyn が日本滞在中故国の妻等に書き送った数多くの書簡は、オルバニー歴史資料館に保管されている。大部分は活字化されコピー可能であるが読み誤り日付ミス等があり注意を要する。これまでに収集した 78 通を整理し、I 書簡について II 年譜 III 駐日アメリカ公使 IV S・R・Brown との親交、その他の人々の消息 V 日本の芸術を愛した文化人 VI 総括 の項目にまとめて研究発表を行った。

ロバート・H・ブラインは 1815 年 2 月 14 日ニューヨーク州の州都オルバニーで誕生した。不動産代理人の父カスパラス・F と母アンヌ・ヒューソンの第一子で弟妹 9 人がいた。オルバニーアカデミーからラトガーズ大学に進学し MA を取得。弁護

士の資格を得た後ニューヨーク州顧問弁護士に就任。26 歳でジェーン・アン・ランシングと結婚し男 3 人女 1 人に恵まれた。家業のオルバニー鉄木材会社を経営する傍ら政界に進出し、オルバニー司法長官、州議会委員を務めた。州議会議長にも選ばれ決断力に富み公明正大な議長であるとの信望が厚かった。1861 年リンカーン大統領より駐日公使に任命された。当時最も遠方で危険な任地での任務を承諾した背景には、南北戦争の影響を被った会社の経済的危機を救うためという事情があった。日本へは長男エドワード・L と二男ロバート・C (愛称パーティー) を伴って出発したが、長男は途上サンフランシスコで病死した。後にブライン夫妻は牧師志望の青年の為に「エドワード奨学金」を寄付した。

1862 年 4 月 15 日横浜に到着。ミカドとタイクンの二大勢力に分裂し緊張関係にある日本での生活を始めた。母国は戦さのただ中にあり他の条約国同様に自国の軍艦を並べて安全を確保することは難しかった。幕府を信頼し警護を委ねることになるがこれは幕府からの信頼を得ることに繋がつた。生妻事件を伝える妻宛の書簡の中で「政府は私の安全について非常に気を遣っているし自分もできる限り用心している。大げさな情報を耳にして動揺しないように。」と書いている。また「この事件は被害者が無作法であった結果という印象が強い。当地の外国人は不幸にしてこの国の人を見下しがちである。ローニン(ローレンス)は失業者と同じであり英米では政府が保護しているが、ここでは政府への攻撃という汚名を着せられている。個人的な恨みに対してはどこの国の政府が責任をとるということではない。」とも書いており日本人に対する好意的視線を感じる。事件後は幕府とイギリスの間に立って賠償交渉の調停役を務めている。しかし江戸の公使館が全焼してからは次第に幕府への信頼が薄れ、英仏蘭と歩調を合わせ連合艦隊に加わる。「ミカドは国内情勢を考慮して攘夷を唱えていただけであるのにタイクンはこれを理解していなかった。この政府を相手にするのは困難である。」と率直な気持を述べている。1865 年ブラインは辞任した。深刻な危機的状況の中であって単独で重い決断を迫られた外交官としてブラインはその任務を十分果たしたといえよう。

書簡からは S・R・ブラウンとの親交が読み取れる。着任直後の復活節に横浜のイギリス領事館でブラウンの説教を聴いたこと。毎月第一土曜日にブラウンの自宅で行う聖餐式に是非参列したいと願っていることを妻に書き送っている。日本に伴った二男パーティーがブラウンの指導を受けて信仰告白をするに至ったことを感謝し、詩編を引用してその喜び

を妻に報告している。ブラウンはブラインの三男のために日本の童話の英訳を送っている。ブラインはユニオンチャーチの役員も務め夕拝で説教を受け持ったこともある。教会用地の取得にも尽力している。ブラウン書簡集には江戸で城や大君の墓所等をまる一日かけて写真撮影したことが記されているが、これは外国人としては初めてのことであり、役人から信頼を寄せられ好感をもたれているブラインの紹介があったからと感謝している。

ブラインは故国に日本の写真を何枚も送っているがブラウンが撮ったものがあることがわかる。筆者は資料館で古い写真のコピーを頂いた。タイクンの墓所のある寺、国旗の翻る公使館（善福寺）、その門、賑う江戸の町の四枚であるが、ブラウンの写真である可能性が高い。ブラインが在任中幕府に軍艦の購入を斡旋した件に関し、私腹を肥やしたとの非難を受けたが、ブラウンはその正当性を認めブラインを擁護していることを記しておきたい。

帰国後ブラインは州法改正のため設けられた機関の議長を務めたり、数多くの銀行、大学の役員を務めたりしたが、1882年2月脳血拴のため死去。67歳。葬儀は母教会である第一改革派教会に於てR・W・クラーク牧師（E・W・クラークの父）の司式のもと行われた。

ロバート・H・ブラインの曾祖父とメアリー・P・ブライン（アメリカミッションホームの創立者）の夫サムエルの祖父とが兄弟である。ホームの青年が牧師になる志を立てたことを知りその学費を援助したのはロバートの妻とその妹の二人であった。日本との縁の深かったこの二人は今故国の同じ墓地に眠る。

私は数回オルバニーを訪ねている。第一改革派教会の礼拝にも出席した。その日ロバートの家族席に案内され隣に座ったメアリーの子孫とともに聖餐に与った。国籍の違いもなく時間も越え、ただ同じ信仰をもつ者として神の平安にあることを感じた。忘れることのできない主の日である。

「赤い靴はいてた女の子」の

モデルはくきみちゃん

石川 潔

1921年12月号の〈小学女生〉に詩人野口雨情は「赤い靴」という童謡を発表している。その詩の一番、二番、三番は、

- ① 「赤い靴 はいてた 女の子
異人さんに つれられて 行っちゃった」
- ② 「横浜の埠頭から 船に乗って
異人さんに つれられて 行っちゃった」
- ③ 「今までは 青い眼に なっちゃって
異人さんのお国に いるんだろ」

（四番は略）

この歌のモデルは実在の少女で、その名をくきみ」という。きみは1902（明治35）年7月15日、岩崎かよの長女として静岡県富士見村（現在の静岡市清水区）に生まれる。父親の記載がないので、嫡出子でない子。その当時では「て、なし子」と言われ、母子ともにいじめられていた存在と考えられる。現在なら「シングルマザーとその子供」とよばれる母子である。最初は弟の戸籍に入り「岩崎きみ」となるが、2才のとき、近所に住む知人の佐野安吉の戸籍上の養女となり「佐野きみ」となる。〈かよ〉は18才で「父親のわからぬ子」を生んだ娘という近所の評判に耐えられず、当時の北の僻地の北海道に渡る。まだ幼いくきみちゃんを背負って誰一人知人のいない土地で働くくかよにやがて正式に結婚を申し込む男がいた。青森・津軽出身の鈴木志郎である。志郎は平民社運動に共鳴する青年で、平民社の開拓農場に入植するにあたりくかよと結婚をさめる。しかし、幼いくきみちゃん）は開拓地の寒さには耐えられないことを2人は予想し、思いめぐらしていた。その頃北海道に現れた養父の安吉は「きみちゃんを育ててくれる人をさがす」と約束する。この安吉は、静岡の人たちの話では、

.....

「前科者で、北海道の凶悪犯を収容する監獄にいた」とのことである。しばらくして安吉が再び現れて、「きみちゃんを育てて『養女にしたい』という子供のいないアメリカ人夫婦がいる」との話を持って来る。そのアメリカ人はキリスト教の宣教師だという。きみちゃんの幸せを考えてくかよはきみちゃんを外国人夫婦のもとへ預ける決心をする。

そのアメリカ人の宣教師夫妻は米国メソヂスト教会の宣教師チャールズ・W・ヒュエット（1864～1935）と夫人のエンマ・A・ヒュエット（1870～1964）である。ヒュエットとは1900年から5年間、北海道で活躍し、一旦帰国して再び1907年から2年弱札幌で活躍している。この時にきみちゃんを非公式に養女として育てている。くかよは一旦きみちゃんをこの宣教師夫妻に預けたので、会わないこととし、娘の幸福を考えていたようである。しかし外国人宣教師とはどんなことをする人たちのかの知識を持っていなかったようである。くか

よ)は新しい夫・志郎とともに羊蹄山のみもと・真狩村の開拓地に入植して行った。くかよ)はきみちゃんが「異人さんにつれられて行っちゃった」と思いこんでいたのである。ヒュエット夫妻はきみちゃんを連れて帰国することになったが、重い病気(結核)になっていることがわかり、東京でメソジスト教会系の孤児院に預けての帰国となっている。従ってきみちゃんは「横浜の埠頭から船に乗って異人さんにつれられて行っちゃった」のではなかったのである。赤い靴をはいていたかどうか不明である。

このことをくかよ)は知らされていなかった。夫・鈴木志郎は苦勞に苦勞を重ねて開拓に打ち込むが、ついに限界で開拓を諦め離農して行く。入植して2年目のことである。平民社農場も離農者が増していき、やがて閉鎖された。

鈴木志郎とかよ)の夫婦にも新しい子供が与えられ、職を求めて札幌に着く。そして新しい職場を与えられた。札幌の新聞社「北鳴新報」で事務職として働くことになる。この新聞社に記者として着任してきたのが詩人・野口雨情であった。新聞記者になりたかった志郎は雨情と親しく交際を続け、二人で大きな家を借り2家族共同で住むこととなる。このような関係からくかよ)は「もう一人の娘がいて、外国人夫妻に預けた。この娘はこの異人さんにつれられて行ってしまっただろう…」と雨情夫妻に話をする。後にこの話をもとに1921(大正10)年雨情は「小学女生の12月号」に童謡「赤い靴」を発表したのである。

この詩の発表前にきみちゃんは麻布の孤児院で1911(明治44)年9月15日、9歳の短い人生を終えている。その孤児院とは貧しい生活の中にある子供たちのために「東洋英和女学校」の数人の生徒たちの努力で開設された施設であった。東洋英和女学校の近く(現在の東洋英和女学院の校地と異なるが)、麻布・永坂町50番にあり、正式には「永坂孤女院」という名称で現在の麻布十番街の近くである。くきみちゃん)の死因は「結核性腹膜炎」となっており、青山霊園内の鳥居坂教会墓地に埋葬されている。

一方きみちゃんを養女にして帰米するはずだったヒュエット夫妻はコロラド州及びオレゴン州で教会を持ち、1928年引退するまで活躍している。牧師のヒュエットは1935年に天に召された。夫人のエンマは1964年2月27日まで長寿を全うしている。この2人もくきみちゃん)のその後については知らされていなかったようである。

くきみちゃん)のことは母親くかよ)も知らされ

ていないまま北海道の札幌から樺太(現在のサハリン)へそして小樽と転じているが、その思い出だけはいつまでもこっていたようである。詩の中にもあるように「異人さんに逢うたびに考え」ていたようである。くきみちゃん)の写真も絵もない。きみちゃん自身の作文も読んだ本も残っていない、くきみちゃん)に関する記録は、青山霊園管理事務所にある「埋葬記録」だけである。そこにあるのは「静岡県・平民 佐野きみ 明治三十五年七月十五日生。明治四四年九月十五日結核性腹膜炎にて死亡」だけである。これが今残る「きみちゃんの記録」である。しかし、童謡「赤い靴」で有名となった「赤い靴はいてた女の子」のモデルのくきみちゃん)の像はなんと日本各地の6カ所に建てられている。

① 横浜・山下公園内「赤い靴の女の子」1979年市民運動で「童謡・赤い靴の像を建てよう」との呼びかけに応じた42,992人の協力者からの基金で建てられた。

② 静岡・日本平山頂「母子像」誕生した現静岡市清水区内のゆかりの地。

③ 港区・麻布十番「きみちゃんの像」

モデルのきみちゃんが生活し、死去した施設「永坂孤女院」の近くの地。

④ 北海道留寿都村「母想像」

母親が入植した開拓農場の近く。16才のきみちゃんを想像した立像。(きみちゃんは開拓地に行っていない)

⑤ 北海道・小樽運河公園「赤い靴親子像」

母親・かよ)と志郎)の夫婦が晩年小樽に住んでいたとのことで親子3人を想像してつくられたもの。(実際には小樽で親子三人で暮らしたことはない)

⑥ 北海道・函館港前「赤い靴女の子像」きみちゃんが母親におんぶされて「到着したのが函館の港」であることから建てられたとのこと。(赤ちゃんではなく、成長してハンドバッグを持っている立像である。)

◎2010年に横浜駅コンコースに東西連絡通路)に小さな「赤い靴の女の子像」がガス燈のミニチュアに挟まれて設置されている。これは山下公園)に設置された時つくられた多数(999体と伝えられている)のうちのひとつである。

この薄幸の少女くきみちゃん)本人は何ひとつ語ってはいない、勿論「赤い靴をはいてた」記録もない。もし(この言葉は歴史を語るものには禁句ではあるが…)宣教師・ヒュエット夫妻につれられてアメリカに行っちゃって、正式に養女として、キミ・ヒュエットの名前で「異人さんのお国の人」となっていたら、日系婦人宣教師第一号として来日す

るようになったかもしれない。そして生まれ故郷の近くの静岡のメソヂスト系キリスト教学校で「異人さんの言葉」の授業を担当していたと推測するのは可能である。「赤い靴はいてた女の子」は野口雨情の詩の中のフィクションである。しかし、そのモデルとなった薄幸の少女は、この童謡を歌われる度に人々に思い出されているのである。

山下公園内の「赤い靴はいてた女の子」の像は海に向かい、遠い「異人さんのお国」アメリカ方向をさびしげに眺めて座っている。

【最近出された書物】

※ネイサン・ブラウン訳『新約全書 現代仮名字体版』新教出版社 ¥7,000円 2011年3月発行
この書は、ブラウンが変体仮名で書いた『志無也久世無志與』を現代仮名字体にして、読みやすくしたもので、川島第二郎先生が「刊行にあたって」という序文を書き、積極的に出版に関わった。日本基督教団相模原教会ヘルモン会有志の方たちが現代仮名字体版の翻字作業を進めていたものが結実、1冊の本となった。おめでとうございます。著者割引6,000円でお分けできるとのこと。購入希望者は岡部まで連絡下さい。

※大島良雄著『バプテストの瀬戸内海福音丸伝道 1899-1940』ダビテ 2011年2月発行 ¥1,800円
ビッケル船長とその後継者たちの伝道について記述。大島先生が次々に本を出される。驚くばかりである。

※小宮まゆみ『敵国人抑留一戦時下の外国民間人』吉川弘文館 2009年3月 1,800円
「アジア・太平洋戦争勃発とともに、日本国内にいた外国籍の民間人は、次々と全国各地の抑留所に収容された。抑留所で彼らはどのように暮らしていたのか。不足していく食料、迫りくる空襲。抑留所での実態に迫る」裏表紙より

長年の研究成果が実り、吉川弘文館の「歴史文化ライブラリー267」に収まった。

※齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソヂスト教会の海外伝道』新教出版社 2009年8月 2,800円
女性宣教師たちの伝道活動は、学校教育と文筆や出版活動の面でも優れた活動を行い、「地理的知識」の普及者でもあり伝達者でもあった。地理学の視点から明治期の女性宣教師に着目した労作。

この書は、齋藤さんの博士論文『「地理的知識」の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師』がもととなっている。

研究発表リスト (その34)

- 第306回 2009.9.19 村岡恵理
「村岡花子の生涯と「赤毛のアン」に読み取るメソヂストの足跡」
- 第307回 2009.10.17 川島第二郎
「N. ブラウン『志無也久世無志與』と聖書と訳史」
- 第308回 2009.11.17 辻直人
『金沢から見た「宣教150年」明治学院との関わりにおいて』（ヘボン・ブラウン・フルベッキ来日150周年記念講演会）於：明治学院記念館小チャペル
- 第309回 2009.12.19 岡部一興
「ヘボン研究の現状」出版記念会
- 第310回 2010.1.16 三輪順康
「横浜の明治・大正期を生きるメソヂストの信徒たち」
- 第311回 2010.2.20 小笠成美
「武藤富男氏の遺したものは何か」
- 第312回 2010.3.20 牧律
「『寄生木の歌』から探る山室民子の葛藤」
- 第313回 2010.4.17 海老坪真
「コベル宣教師の美談伝説と真相」
- 第314回 2010.5.15 吉馴明子
「若き植村正久の信仰と宣教——雨宮栄一『若き植村正久』を手がかりに」
- 第315回 2010.6.19 中島耕二
「訓令12号と外国ミッションの対応」
- 第316回 2010.7.17 太田愛人
「吉野作造とキリスト教」
- 第317回 2010.9.18 安部純子
「書簡に見た第2代アメリカ駐日公使ロバート・H・ブライン」
- 第318回 2010.10.16 清水秀樹
「ヘボン博士の足跡—その働きと死に対する態度」
- 第319回 2010.11.20 守部喜雅
講演会「フルベッキ博士が明治日本に遺したもの」
明治学院歴史資料館主催、明治学院歴キリスト教研究所、横浜プロテスタント史研究会共催
- 第320回 2010.12.18 石川潔
「野口雨情作詞 赤い靴をはいていた女の子のモデルくきみちゃん」
- 第321回 2011.1.15 渡辺祐子
「満州伝道の記憶をとらえ直す熱河宣教を中心に」
- 第322回 2011.2.19 中井幸夫
「美善教会と廃娼運動」

横浜プロテスタント史研究会会計報告 2010年度

2010年度会費納入者

《編集後記》

東日本大震災によって苦しんでいる方々にお祈りします。大地震、津波、加えるに原発事故、三重苦に悩む福島県はじめ宮城、岩手、茨木、千葉で被災した現状は、言葉に言い表すことの出来ない深刻なものをもたらした。取り返すことが出来ない大惨事、そして人災。取り返すことのできないものを取り返そうとしている現地の人々、その背中をどう支えることができるか、一人一人に問われている。(岡部記)